

報道関係者各位

2021年10月21日  
 国立成育医療研究センター

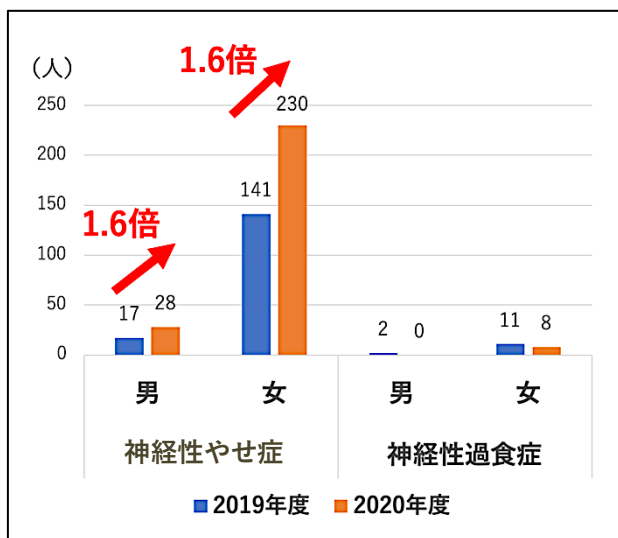
**コロナ禍の子どもの心の実態調査**  
**摂食障害の「神経性やせ症」が1.6倍に**  
 子どもの心の診療ネットワーク事業、全国26医療機関調査

**【概要】**

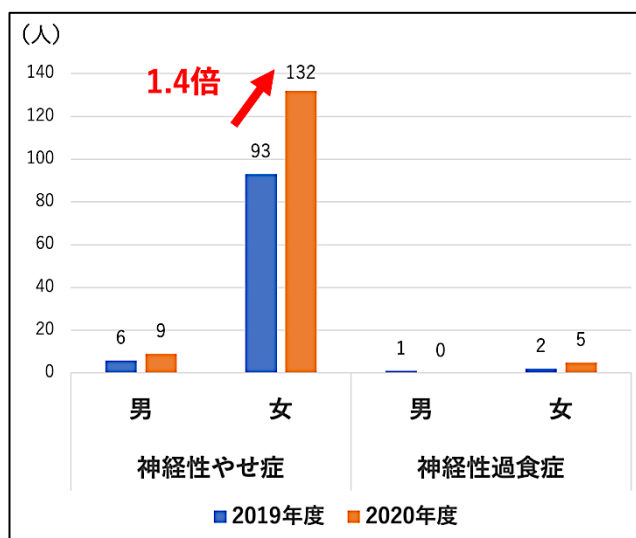
国立成育医療研究センター（所在地：東京都世田谷区大蔵、理事長：五十嵐隆）が行っている子どもの心の診療ネットワーク事業では、新型コロナウイルス感染症流行下の子どもの心の実態調査を行いました。全国26医療機関が参加した本調査で、コロナ流行前の2019年度と比較し、2020年度では神経性食欲不振（神経性やせ症）<sup>1</sup>の初診外来患者数が約1.6倍、新入院患者数が約1.4倍に増加していたことが判明しました。コロナ禍でのストレスや不安が影響していると推測されます。

摂食障害の病床数が不足していることも判明し、摂食障害を治療できる医療機関の拡充が求められます。また、家庭や教育機関では、子どもの食欲や体重の減少に気を配り、深刻な状況になる前に医療機関の受診につなげることが必要です。

初診外来患者



新入院患者数



<sup>1</sup>神経性やせ症とは、摂食障害の一つです。極端に食事制限をしたり、過剰な食事後に吐き出したり、過剰な運動を行うなどして、正常体重より明らかに低い状態になる疾患です。病気が進行すると、日常生活に支障をきたすこともあります。アメリカ精神医学会の精神疾患の診断・統計マニュアル第5版(DSM-5)では、①正常の下限を下回る低体重、②肥満恐怖あるいは体重増加を妨げる行動の持続、③自己評価に体重や体型が不相応な影響を受け、低体重の深刻さが認識できないなどの特徴が挙げられています。

## 【プレスリリースのポイント】

- ・ コロナ禍で、食事を食べられなくなる神経性やせ症が増加しています。
- ・ 子どもの心の診療ネットワーク事業拠点病院から、コロナ禍で神経性痩せ症の患者が重症化し、入院期間が延びているとの報告もありました。
- ・ しかし、摂食障害の患者のための病床数が不足していることが分かりました。摂食障害の病床充足率について回答があった5施設の内、4施設で病床使用率が増加しており、充足率(現時点で摂食障害で入院している患者数/摂食障害の入院治療のために利用できる病床数×100)が200%を超える施設が2施設ありました。摂食障害を治療できる医療機関が少ないこともあり、特定の施設に入院患者が集中していることが推測されます。また、新型コロナウイルス感染者への病床数を増やしたため、摂食障害の患者の入院まで対応できなくなったことが影響している可能性も考えられます。
- ・ 神経性やせ症の患者増加の背景には、緊急事態宣言や学校の休校などの生活環境の変化によるストレス、子どもたちが感染対策のために家に引きこもっていること、行事などのアクティビティが中止になったこと、友達に会えないこと、新型コロナウイルス感染症への不安などがあると推測されます。当センターが実施したコロナ×こどもアンケート第3回調査では、回答者(6~18歳)全体の73%<sup>2</sup>に、第5回調査では76%<sup>3</sup>に、何らかのストレス反応がみられました。
- ・ コロナ太り対策のダイエット特集の報道やSNSでの情報に、子どもたちが影響された可能性も考えられます。
- ・ コロナ×こどもアンケート第4回調査では、「あまり食欲がない、または食べ過ぎる」と回答した子ども(9~18歳)が、全体の約半数でした(過去7日間のうち、数日、半数以上、ほとんど毎日と回答した者の合計)<sup>4</sup>。また、コロナ×こどもアンケート第5回調査では、いまの自分の体型について回答者(9~18歳)全体の38%が、「太りすぎ」「太りぎみ」と思っていると回答し、48%が痩せたいと思っていると回答していました。さらに、痩せるために、回答者全体の4%が「食事の量を普段の3分の2以下に減らす」、2%が「食べたものを吐く」と回答しています<sup>5</sup>。これらから、「コロナ禍の子どもの心の実態調査」で判明した患者数以上に、摂食障害の潜在患者や予備軍の子どもがいる可能性も推測されます。

## 【背景・目的】

新型コロナウイルス感染症の流行で、子どもたちの生活も大きく変わり、心にも様々な影響を及ぼしています。そこで、国立成育医療研究センターが行っている子どもの心の診療ネットワーク事業では、コロナ禍の子どもの心の実態調査を把握するため、2021年4月30日~6月30日に本調査を実施しました。子どもの心の診療ネットワーク事業の全国26医療機関にアンケートを送付し、20歳未満の患者について回答を得ました。

---

<sup>2</sup> コロナ×こどもアンケート第3回調査報告書(2020年9月~10月実施)P32

[http://www.ncchd.go.jp/center/activity/covid19\\_kodomo/report/CxC3\\_finalrepo\\_20210206am3.pdf](http://www.ncchd.go.jp/center/activity/covid19_kodomo/report/CxC3_finalrepo_20210206am3.pdf)

<sup>3</sup> コロナ×こどもアンケート第5回調査報告書(2021年2月~3月実施)P32

[https://www.ncchd.go.jp/center/activity/covid19\\_kodomo/report/CxC5\\_repo\\_20210525.pdf](https://www.ncchd.go.jp/center/activity/covid19_kodomo/report/CxC5_repo_20210525.pdf)

<sup>4</sup> コロナ×こどもアンケート第4回調査報告書(2020年11月~12月実施)P55

[https://www.ncchd.go.jp/center/activity/covid19\\_kodomo/report/CxC4\\_finalrepo\\_20210210.pdf](https://www.ncchd.go.jp/center/activity/covid19_kodomo/report/CxC4_finalrepo_20210210.pdf)

<sup>5</sup> コロナ×こどもアンケート第5回調査報告書P19、20

## 【今後の展望・発表者のコメント】

- ・ 神経性やせ症患者が増加し、また入院日数も伸びていることから、入院病床数を確保することが必要になっています。また摂食障害を診察できる医療機関の拡充も求められています。
- ・ 神経性やせ症の場合、本人が病気を否認して医療機関での受診が遅れがちです。子どもの食欲や体重の減少に家族や教育機関で気を配り、深刻な状態になる前に、まずは内科、小児科などのかかりつけの医を受診することが必要です。

## 【子どもの心の診療ネットワーク事業とは】

都道府県などの地方自治体が主体となり、事業の主導的な役割を担う拠点病院を中心に、地域の病院・児童相談所・保健所・発達障害者支援センター・療育施設・福祉施設・学校等の教育機関・警察などが連携して子どもたちの心のケアを行っています。また、地域でのよりよい診療のため、子どもの心を専門的に診療できる医師や専門職の育成や、地域住民に向けた子どもの心の問題に関する正しい知識の普及を実施。さらに、地域内のみならず、事業に参加している自治体間の連携も強化され、互いに抱える問題や実施事業に関する情報共有も盛んに行われています。国立成育医療研究センターは中央拠点病院となり、この事業を運営しています。

## 【調査協力 医療機関名】(五十音順)

### 〈子どもの心の診療ネットワーク事業 拠点病院・機関〉

- ・ 石川県立高松病院
- ・ 岩手医科大学附属病院 児童精神科
- ・ 大阪精神医療センター
- ・ 金沢大学附属病院 子どものこころの診療科
- ・ 九州大学病院 子どものこころの診療部
- ・ 熊本県発達障がい医療センター
- ・ 高知大学医学部附属病院 子どものこころ診療部
- ・ 国立病院機構医王病院(小児科)
- ・ 国立成育医療研究センター
- ・ 静岡県立こども病院 こころの診療科
- ・ 島根県立こころの医療センター
- ・ 信州大学医学部附属病院 子どものこころ診療部
- ・ 千葉大学医学部附属病院 精神神経科・こどものこころ診療部
- ・ 東京都立小児総合医療センター
- ・ 鳥取大学医学部附属病院
- ・ 長野県立こころの医療センター駒ヶ根
- ・ 長野県立こども病院
- ・ 兵庫県立ひょうごこころの医療センター
- ・ 三重県立子ども心身発達医療センター
- ・ 山梨県立あけぼの医療福祉センター
- ・ 山梨県立北病院
- ・ 山梨県立こころの発達総合支援センター
- ・ 琉球病院

### 〈オブザーバー協力〉

- ・ 神奈川県立こども医療センター
- ・ 獨協医科大学埼玉医療センター  
子どものこころ診療センター
- ・ 和歌山県立こころの医療センター

## 【問い合わせ先】

国立研究開発法人 国立成育医療研究センター  
企画戦略局 広報企画室 近藤・村上  
電話:03-3416-0181(代表) e-mail:koho@ncchd.go.jp